

つないで紡ぐ、メッセンジャーナース。

在宅看護研究センターLLP（有限責任事業組合）が、五月に創設三十周年を迎えた。

一九八六年、日赤医療センター集中治療室（ICU）元看護婦長だった村松静子さんが、病院から街に出たプロナース数名で開業したワンルームマンションの一室には、電話、ポケットベル、コピー機、ワープロ、医療用カメラ、聴診器、血圧計、吸引器など、最小限の必需品だけしかなかった。

その当時、病院や開業医に雇われる形で働く看護師（二〇〇二年までは看護婦）は、医師の指示があった場合以外には医療行為をしてはならないとされ、看護師だけの開業は成り立たないと考えられていた。

十二年前、雑誌の取材でインタビューした際に、村松さんから伺った言葉を紹介しよう。

「在宅で求められる看護は、病院とは明らかに違う。在宅ではそこに医療器具がなければ、手技だけでやらなければならない。救急時の対応も、単に救命

のためではなく、その患者さんのからだを少しでも楽にするのと、痛みをやわらげること、リラックスできるようにするためです。」

「私はひとりのナースとしての看護を買っていただき、それを評価してもらおう。看護に関連する教育も買っていただこう。たとえ私ひとりになっても、十年はつづけよう。」

二〇一〇年、メッセンジャーナースが誕生した。四月に出された『メッセンジャーナース』（村松静子監修、甲州優・武田美和・川口奏子編集、看護の科学校、二〇一六年）に、村松さんの熱い思いが書かれている。

【医療技術が進化・高度化している今だからこそ、看護のプロとして行動すべきこの時期を逃してはならない。看護師だから実行しなければならないことがある。（中略）家族の言いなりになるわけでもない。あくまで自ら動き、対話を重視し、本人の意思を尊重できるように支援す

る。磨き続けた看護の“心とわざ”を惜しむことなく活用し、求める人々と医療の懸け橋になろう。】

（同書「はじめに」iiページ）

医師（病院）と患者（家族）の懸け橋とは、たとえば次のような役割（太字部分）をさす。

○主治医は丁寧の説明をしてくれたが、むずかしくてよくわからないときには、↓医師の説明を患者（家族）が理解できるように、よくかみ砕いて説明してくれる。

○病状説明や治療方針の説明を受けたが、どうしていいか迷うときには、↓患者の立場や生活（背景）、価値観を理解した上で、現実的な見通しなどをアドバイスしてくれる。

二〇〇四年の日本生命倫理学会講演で、野の花診療所院長・徳永進さんが、近代医療の中で私たちが忘れていたものがナースを意味する十四の和語（つむしむ、いつくしむ、さする、さ

さやく、すくふ、はぐくむ、たつとぶ、わらふ、とまどふ、あやまる、ゆるしあう、いのる、ほろびる、ゆいま

ーる（琉球語で助け合う）に隠されていると語った「Nurseの和語」が、『野の花ホスピスだより』（徳永進著、新潮文庫、二〇〇九年）に載っている。

【欧米一辺倒の近代化は、日本では未成熟に終る予感がする。日本には日本の昔人の知恵が、倫理という点においても残されているのではないかと思う。英語で語れないものが和語には隠されている、とちよっと力を入れて語った。（中略）nurseの和語って何だろう。「よしよし」かな、「まもる」かな、「そば」かな、いや「かぼう」、いや違う。何だろう。】

（同書一七二～一七三ページ）

村松さんの、素敵なひと言。

「察して行動、つないで紡ぐ。紡ぐには、察する勘が必要。相手の心に向き合う。目と手”が不可欠。」